

「胸が張り裂ける」の意味

中野伸彦

The Meaning of “Mune ga Harisakeru”

NAKANANO Nobuhiko

(Received September 24, 2021)

一 はじめに

太宰治の「走れメロス」に、次のような一節がある。日没までに帰ってくるという王との約束を守るべく走るメロスと、メロスに走るのをあきらめさせようとするセリヌンティウスの弟子フィロストラトスとのやりとりの場面である。1 「誰だ」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。貴方のお友達セリヌンティウス様の弟子でございます」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、駄目でございます。むだでございます。走るの、やめて下さい。もう、あの方をお助けになることは出来ません」
「いや、まだ陽は沈まぬ」
「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ陽は沈まぬ」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕陽ばかりをみつめていた。走るより他はない。（『走れメロス』〈新潮文庫〉146頁、一九四〇年）¹

ここに、「胸の張り裂ける思い」という言葉が出てくる。これについては、「胸の張り裂ける思い」とあるので、悲しみや苦痛で胸が裂けるような気持を持っている。間に合わないかもしれないと考えると、メロスは悲しく、辛かった。（寺田守（二〇一四）124～125頁）、²「胸が張り裂ける思い」など

というのは苦痛の最大級の比喩表現だろう。そういう苦痛に満ちあふれる様子、³の、見つめ方なのだ。（略）（もしも太陽が没してしまったら）——とのたまらない不安、（没しないでくれ）——との祈るようなねがい。それが、夕日を凝視させるメロスの苦痛だったろう。（板垣昭一（一九九三）107頁）のように、約束した日没に間に合わないのではないかと、悲しくつらい思いを表しているという解釈をみることが出来る。

これについては、こういう解釈もありうるのだろうとは思いますが、「いや、まだ陽は沈まぬ」という、希望を語るメロスの言葉との間に、齟齬があるようにも感じる。本稿は、近代の「胸が張り裂ける（胸の張り裂ける）」の用例をもとに、別な解釈を提案しようとするものである。

二 近代の「胸が張り裂ける」

現代語で「胸が張り裂ける」を使う場合を考えると、悲しみの感情が非常に強く、悲しくつらい気持ちで胸がいつぱいであるという、次のような例が、思い浮かびやすいように思う。

2 「思いやりにあふれた、崇高な人柄の女性でしたよ。亡くなったと聞いたときには言葉を失いました。きょう、ここに来るのも胸が張り裂けるような思いです」（アンソニー・ホロヴィッツ〈山田蘭訳〉『メインテーマ殺人』〈創元推理文庫〉）201頁、二〇一九年）

3 耕作は食べた。バランス良く、それでいて手当たり次第に、あらゆる物へフォークを刺し込み、海老や蟹は手づかみで口に運んだ。(略) 貧乏が悪いのだ。貧乏が、俺を、ここまでいやしくさせたのだ。耕作は、胸の張り裂ける思いで、咀嚼した。食べるよりほかはないと、血の涙を流し、耕作は食べた。(乗代雄介「走れメロス、食べろ耕作、なんでもいい方考えろ由美子」『ミック・エイヴォリーのアンダーパンツ』〈国書刊行会〉55頁、二〇〇七年)

しかし、近代の「胸が張り裂ける」の用例を見ると、そのような場合に限らず、かなり広範囲な感情について用いられている。(2)

たとえば、以下は、菊池寛の『真珠夫人』(文春文庫、一九二〇年)に用いられた「胸が張り裂ける」の用例である。各例の後に、*を付して記したように、悲しみ以外にも、怒り・絶望・同情・やましさ・不安など、さまざまな感情で胸がいつぱいである様を表すのに「胸が張り裂ける」という表現は用いられている。

4 瑠璃子は、胸が張り裂けるように悲しかった。一徹な父は、一度云い出すと、後へは引かない性質(たち)だった。それに対する兄が、父に劣らない意地張だった。彼女が、常々心配していた大破裂(カタストロフ)がとうとう目前に迫って来たのだった。(113頁) *父と兄が、激しく対立するのを見て、悲しく思う

5 「今から考えると、見え透いた罠だったのだ。が、木下までが、俺(わたし)を売ったかと思うと俺はこの胸が張り裂けるようになって来るのだ！」

父は、木下が眼前(めのまえ)にでもいるように、前方を、きつと睨みながら、声はわなわなと顫えた。(176頁) *旧知の間柄である木下に裏切られたことを怒る

6 彼女の小さい胸は、いろいろな烈しい感情で、張り裂けるように一杯だった。青年の心を知ったための大きい絶望もあった、が、それと同時に、青年の烈しい恋に対する優しい同情もあった。母の不誠意な、薄情な態度を悲しむ心も交っていた。どの一つの感情でも、彼女の心を底から覆すのに十分だった。

その上、他人の秘密、他人(ひと)の一生懸命な秘密を、窃み聴きしていることが、一番彼女の心を苦しめた。彼女は、もう一刻も、坐っていることが出来なかった。(489頁) *自分が恋しく思う青年が、自分の母(義

母)に対して、恋しく思う気持ち(青年が、義母を恋しく思う気持ち)を打ち明けるのを盗み聞きして、絶望・同情・盗み聞きしているやましさを感ずる

7 ちょうどその時、美奈子は母と青年との真中に坐っていた。自分を、中央にして、自分を隔てて母と青年とが、何だかわだかまりのある話を始めたので、彼女はかなり当惑した。が、彼女にも母が、一体何を話し出すのか皆目見当が付かなかった。

「お忘れになったの。先夜のお話ですよ。」

瑠璃子の声は、冗談などを少しも意味していないような真面目だった。

「先夜って、いつのことです。」青年の声が、だんだん緊張した。

「お忘れになったの？ 一昨日の晩のことですよ。」

青年が色を変えて駭いたことが、美奈子にもハッキリと感ぜられた。美奈子でさえ、あまりの駭きのために、胸が潰れてしまった。母は、果して一昨日の夜のことを、美奈子の前で話そうとしているのかしら、そう思っただけで、美奈子の心は戦いた。

「一昨日の晩！」青年の声は、必死であった。彼は一生懸命の努力で続けて云った。

「一昨日の晩？ 何か特別に貴女とお話をしたでしょうか。」

必死に、逃路を求めているような青年の様子が、かなり悲惨だった。美奈子は、他人事ならず、胸が張り裂けるばかりに、母が何と云い出すかと待っていた。(520頁) * (6の場面の二日後) 自分と青年がいる場で、母が、6の場面の出来事について、何か言おうとしているのかと、青年の気持ち案じて、不安に思う

他にも、

8 ドオウン。その気配を見た事のあるひとは知っているだろう。日の出以前のあの暁(ドオウン)の気配は、決して爽快なものではない。おどろおどろ神々の怒りの太鼓の音が聞えて、朝日の光とまるつきり違う何の光かねばっこい小豆色の光が、樹々の梢を血なま臭く染める。陰惨、酸鼻の気配に近い。

鶴は、厠の窓から秋のドオウンの凄さを見て、胸が張り裂けそうになり、亡者のように顔色を失い、ふらふら部屋へ帰り、口をあけて眠りこけているスズメの枕元にあぐらをかき、ゆうべのウイスキーの残りを立てつづけにあおる。(太宰治「犯人」『津軽通信』〈新潮文庫〉212頁、一九四八

年)

のような「秋のドオウンの凄さ」を感じる思い、

9 王妃。「ごめんなさい。泣くまいと、さつきから我慢して心にも無い心地悪い事ばかり言っていました。オフィリア、私はあなたから、そんなに優しく言われ、慕われると、せつなくなりませう。この胸が、張り裂けるようでした。オフィリア、あなたは、いい子だね。(太宰治「新ハムレット」『新ハムレット』〈新潮文庫〉231頁、一九四一年)

のような、意地悪いことばかり言っていたのに対して、優しい言葉を返されて、「せつなく」思う思い、

10 むかし、フランソワ・ヴィヨンという、巴里生れの気の小さい、弱い男が、「ああ、残念！あの狂おしい青春の頃に、我もし学にいそしみ、風習のよろしき社会にこの身を寄せていたならば、いま頃は家も持ち得て快き寢床もあるうに。ばからしい。悪童の如く学び舎を叛き去った。いまそのことを思い出す時、わが胸は、張り裂けるばかりの思いがする！」と、地団駄踏んで、その遺言書に記してあったようだが、私も、いまは、その痛切な嘆きには一も二も無く共鳴したい。(太宰治「乞食学生」『新ハムレット』〈新潮文庫〉128頁、一九四〇年)

のような、後悔、

11 そのころ、私は故郷の、やや有名な新聞社の東京支局から招待状をもらっていたのである。——いつも御元氣にてお暮しの事と思ひます。いよいよ秋に入りまして郷里は、さいわいに黄金色の稲田と真紅な苹果に四年連続の豊作を迎えようとしています。此の際、本県出身の芸術方面に關係ある皆様にお集まり願つて、一夜ゆつくり東京のこと、郷里の津軽、南部のことなどお話ねがいたいと存じますので御多忙中ご迷惑でしょうが是非御出席、云々という優しい招待の言葉が、その往復葉書に印刷されて在り日時と場所とが指定されていた。私は、出席、と返事を出した。(略)

自身の弱さが——うかうか出席と返事してしまつた自身のだらし無さが、つくづく私に怨めしかつた。悔いて及ばぬ事である。すべては、私の愚かさ故である。いっそ、こうなれば、度胸を据えて、堂々、袴はいて出席し、人が笑つてもなんでも、てんとして名士の振りを装い、大演説でもぶつてやろうかと、やけくそに似た荒んだ根性も頭をもたげ(略)出よう。やっぱり、袴をはいて出よう。そうして皆に、はきはきした口調で挨拶して、末席につつましく控えていたら、私は、きつと評判がよくて、話がそ

れからそれへと伝わり、二百里離れた故郷の町までも幽かに響いて、病身の老母を、静かに笑わせることが、出来るのである。絶好のチャンスでは無いか。行こう、袴をはいて行こうと、またまた私は、胸が張り裂けるばかりに、いきり立つのだ。捨て切れないのである。ふるさとを、私をあなたに嘲つたふるさとを、私は捨て切れないで居るのである。(太宰治「善蔵を思う」『きりぎりす』〈新潮文庫〉129頁、一九四〇年)

のような、勇み立つ思い、などの例もあり、6に、書かれているように、「烈しい感情で」胸が「一杯」になることに、広く使われていたように思われる。以上を踏まえて考えると、「走れメロス」の「メロスは胸の張り裂ける思い」とある「思い」は、必ずしも、悲しみに限らず、広い可能性に開かれていることになる。「不安」(日没に間に合うか否かの不安)、「後悔」(こんな約束をしなければよかった、あるいは、日没に間に合うように、すっかり余裕をもつて、戻ってくればよかった)、「勇み立つ思い」(日没に間に合うように、最後の力をふり絞つて、がんばろう)なども、ありそうなおことに思える。ただし、「不安」や「後悔」で胸がいっぱいだと考えた場合、「まだ陽は沈まぬ」というあきらめない思いの表明とそぐわないのではないかと、という点が気にはなる。「勇み立つ思い」と考えた場合はさほど問題はないように思われるが、日没ぎりぎりであることを考えれば、そう前向きなばかりなのかという点が、気にはなる。そう考える時、次の「胸が張り裂ける」にならつて解釈する可能性が考えられるように思う。

12 「紅矢、美紅……お前達はどうしてそんな姿になつたのだ。どんな罪を犯してそんな罰を受けたのだ。お父様は今朝濃紅姫が家を出る時、たつた一目お前等二人に会わせてやりたかつた。けれどももし濃紅姫がお前達の姿を見たらば、どんなにか驚くであろうと思つて、無理矢理に我慢をした。けれどもこの胸は張り裂けるようであつたぞ。許してくれ、濃紅姫。噫、妻よ。お前も辛かつたであろう。お前の云うのは尤もだ。紅矢は鉄になつた。美紅は氷になつた。残るは濃紅只一人。どこへも遣りたくないのは尤もだ。遣りたくない遣りたくない。けれども遣らねばならぬ。遣るならば両親が付き添うて、腰元に供させて、華やかに喜び勇んで遣りたかつた。けれどもそれも出来なかつた。身内の者が死ねば、その血筋の者はその日一日と一夜の間、宮中へ出られないのがこの国の掟だ。だから紅矢や美紅はまだ生きてゐる事にして、お前を宮中に出そうと思つたが、そのために又却つて驚かして、悲しまして、涙と一所に送り出した。

噫、兄は鉄になった。妹は氷になった。あとに残ったたった一人は、花で飾った馬車に乗って女王になるために泣きながら王宮に行った。女王になるのが何の嬉しかろう。王宮が何で楽しかろう。ああ。ああ。俺は氣違ひになりそうだ」(夢野久作「白髪小僧」『夢野久作全集 1』〈ちくま文庫〉165頁、一九二二年)

12で語られているのは、どちらの選択をするか(女王になるべく、家を出る娘濃紅を、鉄・氷となって死んだ兄弟に会わせるか否か)で、迷い悩む父の思いである。「走れメロス」にあてはめれば、日没は迫っているが刑場まで走り続けるか、フィロストラトスの言を受け入れて、ここであきらめるかの選択で、悩み苦しむメロスの思いが、「メロスは胸の張り裂ける思いで」として表現されていると考えられるのではないかと思うのである。⁽³⁾

三 おわりに

以上、「胸が張り裂ける」の近代における用例をあげながら、近代の「胸が張り裂ける」は、広範囲に、さまざまな感情で胸がいつぱいである様を表すのに用いられており、「走れメロス」の「胸が張り裂ける思い」も、悲しみで胸がいつぱいという解釈のみならず、刑場まで走り続けるか否かの選択で深く思い悩むさまを表している等の解釈も可能であろうということについて述べて来た。

注

(1) 以下、用例の引用に際しては、振り仮名を省くなど、表記を変えたところがある。また、近代の用例の採取にあたっては、次を利用したところがある。

・青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/>

(2) 現代語の「胸が張り裂ける」がどの範囲の感情に関して使われるかは、人によって、異なりがあるようである。論者は、悲しみに関わるものに限るように思うが、次のように、悲しみに関わるものでない用例もあり、国語辞典によっても、悲しみに関わるものでない用法を、記載しているものもある。

少将は懐から小さな包みを出す。わたしは立ち止まって、それをひらく。赤い、ところどころに花模様のはんぼりがついた長いひもが巻いてあった。

「可愛い」(略)

「そんなに喜んでくれるとは」

「うれしくて、うれしくて胸がはりさけそうだ。わたしどうなってしまうんだらう」(雪舟えま『タラチネ・ドリーム・マイン』(パルコ)171頁、二〇一二年) *贈り物をもたらってうれしく思う

雲英はにやりと笑うとさらにナイフを深く突き刺してきた。

さらに激しさを増す痛みが二吉を襲った。

息をするのもままならない。

胸が張り裂けそうに波打った。

頭の中が鐘のように鳴り続けた。

そして、二吉は気が遠くなった(小林泰三『殺人鬼にまつわる備忘録』〈幻冬舎文庫〉343頁、二〇一五年) *ナイフで刺されて痛さを感じる

張りふくれて裂ける。また、悲しみ、憤り、苦痛などで、胸が裂けるようである。㊦怒りで胸が張り裂ける思いがする。(『小学館

日本語新辞典』初版、二〇〇五年) *「張り裂ける」に与えられた

説明

激しい激情におそわれ、胸が引き裂かれるように感じる。胸が張り

裂ける。(『集英社国語辞典』第三版、二〇一二年) *「胸が裂け

る」に与えられた説明(「胸が張り裂ける」の項には、「↓胸が裂

ける」とある)

(3) 田中実(一九九三)で、刑場での、メロスからセリメンティウスへの詫びの言葉の中に、村を出る際の逡巡(「この佳い人たちと生涯暮らしていきたく願った」139頁、「幾度か、立ちどまりそうになった」140頁)についての言及がないことが指摘されている(61〜62頁)。「メロスは胸の張り裂ける思いで」が、刑場まで走り続けるか否かの選択の悩みに関わるものだとすれば、メロスは、村を出る際の逡巡と、最後に刑場へ向かう際の逡巡と、二つの逡巡を、セリメンティウスに対して、語り落していることになる。

引用文献

板垣昭一(一九九三)『授業のための教師のよみ 「走れメロス」 「一壘手の生還」』(えみーる書房)

田中実（一九九三）「〈メタ・プロット〉へ——『走れメロス』——」（『都留

文科大学研究紀要』第38集）

寺田守（二〇一四）「走れメロス（太宰治）」『文学教材の解釈 電子版』

https://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada3/files/bungaku2014_14.pdf